

P-5

尾瀬ヶ原を事例としたレクリエーション空間と利用者属性からみた利用計画のあり方について—ROS（レクリエーション利用区分プログラム）の概念を用いて—

津田 智匡（東京農業大学） 金子 良知夫（東京農業大学）  
下嶋 聖（東京農業大学） 麻生 恵（東京農業大学）

自然公園の利用者は個人の目的にあったレクリエーション空間を求め来訪する。本研究の対象地である尾瀬ヶ原は日本有数の山岳観光地であり多様な利用がなされている。山岳地域がもつ本来の自然の静寂さを求める利用者にとって、混雑感、利便性、施設整備状況などから自然体験の質の低下が生じ問題となっており、尾瀬ヶ原利用者は実際どのようなレクリエーション空間を求めているか把握する必要がある。

そこで本研究はROS（レクリエーション利用区分プログラム）の概念を用いて利用者の望むレクリエーション体験をいくつかに分類し、分類されたレクリエーション体験ごとに利用者属性を明らかにする。調査結果より利用者の望むレクリエーション空間と利用者属性との関係から、利用計画について考察する。

P-6

富士箱根伊豆国立公園箱根地域における展望施設の実態と評価

園部真依子（千葉大学） 古谷勝則（千葉大学） 油井正昭（桐蔭横浜大学）

景観利用は自然公園の利用目的の醍醐味である。現在、自然公園のあり方に対する見直しの動きが活発になっており、景観利用を積極的に促す展望施設の整備について取り扱うことは重要といえる。そこで、本研究では展望施設の場の持つ特性を維持し改善するための基礎情報を整理することを目的とした。対象地には展望施設を多く有する富士箱根伊豆国立公園の箱根地域を選定し、展望施設の立地状況、景観構造、維持管理状況の現状を明らかにして、その課題を整理した。

展望施設の景観の構造としては、俯瞰景と仰瞰景があり、俯瞰も仰瞰も楽しめるコンケイブ地形が多く見られた。維持管理状況としては、樹木や雑草の伸長によって本来の視界が確保できていない、視軸線が失われている、展望施設までのアプローチ環境が悪化している等の課題が見られた。今後の対策として、視対象等の景観構造を考

慮に入れた維持管理計画の必要性が明らかになった。

P-7

二次草原における環境保全ボランティアの参加意識において－阿蘇野焼き支援ボランティアを対象として－

牧 安奈（東京農業大学） 麻生 恵（東京農業大学） 栗田和弥（東京農業大学）

本研究が対象とする二次草原を保全するためには、人の手による維持管理が必要である。しかし近年、産業構造の変化や地域社会の変容により、二次草原を支えてきた畜産業などの人の営みが衰退し、草原面積の減少や生物多様性の低下などの問題が顕在化してきている。日本最大の草原面積をもつ阿蘇くじゅう国立公園では、地域住民や行政、専門家、ボランティアなどの多様な主体が関わって草原の保全に取り組んでいる。その中のひとつの役割を担っている、ボランティアによる草原維持管理活動は、現在の二次草原の維持管理になくてはならないほどにその必要性を高めており、この活動を持続していくためにもボランティアの人々の意識を明らかにする必要があると考える。そこで本研究では、阿蘇地方の草原維持活動に参加するボランティアを対象とし、二次草原における環境保全ボランティアの意識について明らかにすることを目的とした意識調査を行った。（393文字）

P-8

市民参加・NPOによる自然環境の保全管理の課題に関する調査研究

栗田和弥（東京農業大学）

市民参加やNPOによる自然環境の保全管理が、その活動の必要性和共に実効性が社会的に認められるようになり、今後も担い手としての役割が重要視されるといえよう。しかし、自然環境そのものに対する効果や活動の継続性の確保な未知の点も多い。そこで本論は、活動対象としての自然環境（フィールド）と、市民参加やNPO等の活動主体に着目し、それぞれの課題を明らかにすることを目的とした。まず、文献調査（日本造園学会誌・環境情報科学論文集など）に掲載された論文に基づいてレビュー